

色も色いろ 第70話 ジャパンブルー



戦後アメリカに多く出荷されたティーカップ

青花（あおばな・露草）を描いた染付作品



“ジャパンブルー”という何を思い浮かべますか？

藍染、それともヨーロッパの印象画家に強い影響を与えた安藤広重の「東海道五拾三次」や葛飾北斎の「富嶽三十六景」に代表される浮世絵に登場する空や水の青＝ブルジャンブルー（ベロ藍）、はたまた染付陶磁器の呉須（酸化コバルト）でしょうか？

ネットで検索すると真っ先にヒットしたのが、“ジャパンブルージーンズ”。岡山県倉敷市児島地区発祥のブルージーンズがジャパンブルージーンズの名で海外に進出していると云う。ブルージーンズの染料がインジゴブルーという意味では、藍染の一種と見なすこともできるだろう。瀬戸内航路の要衝、児島地区は、嘗ては船の帆、帆布製造の地として栄え、厚地の織物加工を得意としたことからジーンズの街としてその伝統が付け継がれている。数年前に倉敷に云った折には、ジーンズ地のスーツや浴衣と云った製品開発など、新たな取り組みに感心したのを記憶している。

私の住む町瀬戸では、ジャパンブルーと云えば、染付である。つい先日まで、瀬戸の陶磁美術館で特別展も開かれていた。染付と云えば、白磁に呉須と呼ばれるコバルトブルー顔料で色付けされた陶磁器である。コバルトブルー顔料そのものの起源はペルシャであるが、中国の景德鎮で、官窯（かんよう）が1000年前に開窯し良質のカオリンを原料とした白磁の絵付けとして用いられるようになると、青花（せいか）とよばれ、東は韓国を経て日本へ、西はシルクロードや海路を通じてヨーロッパへと広がっていった。清代に入り、景德鎮が戦乱によって生産が停滞すると、日本の有田がとってかわり、ヨーロッパに「伊万里焼」として広がり、ジャパンブルーの名が定着した。戦後も土産物としてアメリカ等に出荷されていた名残を見る（左上の写真）。底に芸者ガールの透かしを施したあたりに商魂を見る。左下は瀬戸の染付工芸館で学ぶ若い作家の青花（あおばな・露草）を描いた作品である。